

# 万引き防止対策におけるエビデンスに基づく

## 社会的実践サイクル

—店舗および店内保安員の調査結果に基づく未然防止のための  
店内声かけマニュアルの作成とその実施—

大久保 智生<sup>1</sup>・岡田 涼<sup>1</sup>・時岡 晴美<sup>1</sup>  
堀江 良英<sup>2</sup>・松下 昌明<sup>2</sup>・高橋 護<sup>2</sup>  
尾崎 祐士<sup>3</sup>・藤沢 隆行<sup>3</sup>

### 要約

本研究では、2011年に作成し、配布した店舗向け万引き防止のための店作りマニュアルの課題を明らかにし、店舗調査と保安員調査の結果をもとに万引きを未然に防止するための新たな店内声かけマニュアルを作成した。その後、実際の店舗で実験的に試行し、その効果について検証を行った。その結果、未然防止のための店内声かけの有効性が示唆された。こうした取り組みも含めて、これまでの取り組みのあり方から、エビデンスに基づく万引き防止の社会的実践サイクルについて考察した。

キーワード：万引き防止対策、店舗、店内保安員、店内声かけ

### 研究の背景と目的

近年、全国的に万引き犯罪が大きな社会問題となってきた。これまで先行研究では、被疑者を対象とした調査(降旗, 1983; 「万引きをしない・させない」社会環境づくりと規範意識の醸成に関する調査研究委員会, 2009; 皿谷・三阪・濱本・平, 2011; 田中・田中, 1996)や一般の青少年を対象とした調査(永岡, 2003; 上野・中村・本多・麦島, 2009; 全国万引犯罪防止機構, 2010)、店舗を対象とした調査(「書店経営」編集部, 1998; 全国万引犯罪防止機構,

2010)が行われ、万引き防止対策に関する提言が行われている。しかし、先行研究では、調査結果に基づいた提言は行われているものの、調査結果に基づいた実践を行い、それを明確に評価している研究はないのが現状である。

近年、エビデンスに基づいた犯罪予防について社会的関心が高まっており(Sherman, 2004)、特に社会安全政策の観点から学問と実務の連携の重要性が指摘されている(四方, 2005)。こうした中、科学的手法による分析に基づいた防犯対策が求められているといえる。万引き防止

1 香川大学教育学部 (Faculty of Education, Kagawa University)

2 香川県警察 (Kagawa Prefectural Police)

3 全国警備保障 (Zenkoku Security Guard)

においては、結論ありきの調査が行われることが多く、大久保(2011)が指摘するように規範意識の低下が確認されていないにもかかわらず、規範意識の醸成に過度に焦点が当てられていることから、エビデンスに基づいた万引き防止対策の推進が今後求められるといえる。

さて、万引き犯罪は、香川県においても社会問題になっており、人口1000人当たりの万引きの認知件数が2009年まで7年連続ワースト1位であることから、万引き犯罪の防止対策が喫緊の課題となっている(大久保, 2012)。こうした中、香川県警と香川大学の共同事業として子ども安全・安心万引き防止対策事業が立ち上がり、万引き防止対策に関する提言を行うために、県内の万引きの実態を把握し、その要因を探る調査を行うこととなった。

被疑者を対象とした調査では、香川県で2010年の4月から9月までの半年間に取り調べを受けた被疑者を対象とした研究を行った。大久保・堀江・松浦・松永・江村(印刷中)の研究では、世代や初犯と再犯では万引きに関する心理的要因は異なることを明らかにしている。また、大久保・堀江・松浦・松永・江村・永富・時岡(2012)の研究では、周囲の人間の反応が万引き犯罪の抑止要因となっていることを明らかにしている。このように、被疑者の世代ごとに属性や心理的要因が異なることから、被疑者の世代によって異なる対策を立てる必要性が示唆された。

一般市民を対象とした調査では、香川県内の一般の青少年と高齢者、青少年の子どもがいる保護者を対象とした研究を行った。大久保・堀江・松浦・松永・宮前・宮前・岡田・七條(2012)の研究では、一般の青少年と高齢者は万引きに対するとらえ方が異なっていることを明らかにしている。大久保・宮前・宮前(2012)の研究では、学校段階によって一般の青少年の万引きに対するとらえ方が異なっていることを明らかにしている。宮前・堀江・松永・宮前・大久保(2012)の研究では、年代や生活の実態によって、一般の高齢者の万引きに対するとらえ方が異なっていることを明らかにしている。大久

保・杉本・時岡・常田・西原(2012)の研究では、性別や万引きの経験によって保護者の万引きのとらえ方が異なっていることを明らかにしている。このように、一般市民においても世代ごとにとらえ方が異なっていることから、一般市民向けの対策も世代によって異なる対策を立てる必要性が示唆された。

店舗を対象とした調査では、香川県内の事業所を対象とした研究を行っている。大久保・堀江・松永・永富・時岡(2012)の研究では、万引きの多い店舗や少ない店舗の特徴を明らかにしている。大久保・堀江・松浦・松永・永富・時岡・江村(印刷中)の研究では、客の観察や店員教育などのソフト面の整備が万引きに対する効果的な対応や対策であることを明らかにしている。このように、万引きの多い店舗の特徴や効果的な対応や対策が明らかになったことから、店舗に対して調査結果に基づいた万引きされにくい店作りを提案していく必要性が示唆された。

こうした調査結果に基づいて、社会全体での万引き防止を推進するために、万引き被疑者を取り囲む地域や環境に焦点を当てた取り組みを香川県警察や弁護士、万引きGメンと呼ばれる保安員など様々な機関や人と連携して行うこととした。そして、特に一般市民を対象とした取り組みと店舗を対象とした取り組みを行うこととなった。一般市民を対象とした取り組みとしては、調査結果から世代によって万引きに対する意識が異なることから、万引き防止啓発DVDを制作した(時岡・大久保・有馬, 2012)。大久保・時岡・有馬・松浦・高橋(2012)の研究におけるDVDの評価の結果から、単にDVDを視聴してもらうだけでなく、教育プログラムの一部として活用することとした。そして、現在、世代ごとの教育プログラムの開発およびその効果の検証を行っている。

店舗を対象とした取り組みとしては、調査結果から警察への通報やソフト面の整備など効果的な万引きへの対応や対策が示唆されたことから、保安員の意見も参考にしながら、調査結果から示唆される内容を盛り込んだ万引き防止の

ための店作りマニュアルを作成し、香川県万引き防止協議会を通して配布を行った(時岡・大久保・堀江・松永, 2012)。作成したマニュアルは、時岡・大久保・堀江・松永(2012)の研究において明らかになっているように、店舗から高い評価を得ている。しかし、当然のことながら、こうした店舗を対象とした取り組みには問題点もある。したがって、店舗に対する取り組みの問題点を明らかにし、新たな取り組みを行うために現在の問題点を踏まえた実態調査を行う必要がある。そして、新たな取り組みを実践し、その効果について評価を行う必要がある。

そこで、本稿では、まず、2011年に作成し、配布した店舗向け万引き防止マニュアルの問題点を明らかにする。次に、店舗と保安員の実態調査の結果をもとに万引きを未然に防止するための新たなマニュアルを作成する。その後、実際の店舗で実験的に試行し、その効果について検証する。以上の取り組みを踏まえ、万引き防止対策におけるエビデンスに基づく社会的実践のサイクルについて考察する。

#### 万引き防止のための店作りマニュアルの課題

これまで都道府県別に多くの万引き防止マニュアルが制作されてきたが、時岡・大久保・堀江・松永(2012)が指摘しているように、従来の万引き防止マニュアルは、エビデンスに基づいたものといえるものはあまりない。また、見やすさや使いやすさなどは考慮されずに、これまで数多く制作されてきたといえる。こうした従来の万引き防止マニュアルの問題点を踏まえ、エビデンスに基づいて万引き防止マニュアルの作成を行った。その結果、当初1000部ほど印刷したが、2000部の増刷が決定し、調査結果でも活用している店舗が多く、配布したマニュアルも高い評価を得ており、こうした取り組み自体の継続を店舗が願っていることも明らかとなっている(時岡・大久保・堀江・松永, 2012)。

しかし、香川県万引き防止対策協議会が作成した万引き防止のための店作りマニュアルには問題点も存在する。問題点は大きく2つ挙げら

れる。1つ目は、全件通報制を基礎とした作りであるが、全件通報制が店の現実にそぐわない可能性がある点である。全件通報制は理念としては、警察が把握することで万引きを繰り返さないように、立ち直りの機会を与えるためのものといえるが、店の負担を考えると、全件通報制は現実的な対策とはいえない可能性がある。現実には、被害届の簡素化が推進されているものの、万引き犯を捕まえるほど人手が割かれ、店舗側のコストがかかる仕組みとなってしまう。2つ目は、万引き防止のための店作りマニュアルは万引きされにくい店づくりの提案であり、起きた際の対応や起きる前の対策を提案しているが、万引きを思いとどまらせるという視点が欠けていることである。現実には、万引き犯の中には気づいたら万引きをしていたという者もあり、声をかけられていたら万引きしなかったという者もいる。このように、評価が高い万引き防止のための店作りマニュアルにも問題点があるという。

この2つの問題を解決する対策として、事業に関わっている保安員から未然防止のための店内声かけを提案された。未然防止のための店内声かけとは、これまでのような店外に出るのを待って、捕捉するのではなく、店内ルールとして、店内でポケットやカバンに隠匿することを禁止し、隠匿した時点で声をかけて商品を出してもらうことで、未然に万引きを防止しようとするものである。この手法は、コストの面で被害届提出が面倒な店にとって、思いとどまらせるという意味で、万引き犯罪としないため、保安員を含む店舗、被疑者、警察にとってメリットのある対策であるといえる。また、他県でも未然防止のための店内声かけは店内ルールとしてポスターが作成され実施されており、現行の法律の範囲内で実施可能であることも弁護士とのやりとりから明らかになった。このように店舗や保安員だけでなく、警察や被疑者にとっても望ましいものであると考えられた。もちろん未然防止のための店内声かけは、店舗が万引き犯を捕捉することを妨げるものではない。これまで通りに、店外に出るまで待って万引き犯を

捕捉するのも自由である。しかし、前述のように万引き犯の中には、声をかけられていたら思いどまっていた者もいることから、これまでのような店外に出たところで捕捉するだけではなく、万引きになる前に声掛けをして未然防止するのも一つの対策として考えられるだろう。

未然防止のための店内声かけは、保安員にとって、自らの仕事を減らす可能性もあるが、声をかけられないような個人や集団に対しては保安員が声をかけるなど、万引き犯に応じた対応が可能になるといえる。つまり、これまでの店外に出た際の捕捉と未然防止のための店内声かけは排他的なものではなく、並行して実施できるものであるといえる。そのためにもこうした新たな対策を店舗がどのように考えるのかについて検討する必要がある。さらに、もし実施するのであれば、店舗の店員への教育も含めて

考えていく必要がある。実際、他の都道府県の警察では未然防止のための声かけポスターを作成しているが、隠匿時の見るべきポイントや声かけの仕方などについては詳細に指導しているわけではない。したがって、店内声かけの実施において店員教育に必要な事柄についてまとめ、店内声かけマニュアルを作成するために店舗と保安員の実態調査を行うこととした

本稿では、まず、店舗側の被害届提出の面倒さも含む万引き対策への意識、万引きに対する態度などを明らかにする。また、現在の声かけ場所と効果的だと思う声かけ場所、そして、効果的な店内声かけの方法について明らかにする。次に、万引き犯と最も対峙している保安員の被害届提出の面倒さも含む万引き対策への意識、万引きに対する態度などを明らかにする。また、現在の声かけ場所と効果的だと思う声か

次のような行為を見かけた場合は

# 声をかけさせて頂きます。



代金を支払う前に  
商品を  
衣類のポケット等に  
入れる



代金を支払う前に  
マイバック、  
カバン、袋等に  
入れる

この他、紛らわしい行為についても  
声をかけさせて頂く場合があります。  
(場合によっては警察に通報します。)



Table 1 店舗の万引き対策への意識の度数分布

項目		度数	パーセント	平均値	標準偏差
レイアウトの変更：万引きを減らせるなら、店のレイアウトを変えてもよいと思いますか	変えたくない	15	7.5	2.874	.893
	どちらかというに変えたくない	48	24.1		
	どちらかというに変えてもよい	83	41.7		
	変えてもよい	53	26.6		
店員教育プログラムの必要性：万引き防止を目的とした店員教育のためのプログラムが必要であると思いますか	必要でない	4	2.0	3.487	.658
	どちらかというに必要でない	6	3.0		
	どちらかというに必要である	78	39.2		
	必要である	111	55.8		
対策のさらなる推進：ポケットやカバンなどに商品を入れた時点で声かけをすることで、万引きを未然に防止したいと考えています。このことについてどう思いますか	しないほうがよい	28	14.4	2.979	1.093
	どちらかというにしないほうがよい	34	17.4		
	どちらかというにしたほうがよい	47	24.1		
	したほうがよい	86	44.1		
被害届提出の面倒さ：万引き犯を捕まえたとき、警察に被害届を提出することが面倒であると思いますか	面倒ではない	97	48.0	2.010	1.079
	どちらかというに面倒ではない	25	12.4		
	どちらかというに面倒である	61	30.2		
	面倒である	19	9.4		
万引きに対する責任感：万引きされたとき、責任を感じますか	感じない	17	8.6	3.239	.925
	どちらかというに感じない	15	7.6		
	どちらかというに感じる	69	35.0		
	感じる	96	48.7		

け場所、そして、万引き防止に必要な知識、万引きされやすい商品、万引きする人の特徴について明らかにする。

#### 店舗調査の結果

店舗における万引き対策について検討するため、香川県内の312店舗を対象とした郵送によるアンケート調査を実施した。アンケート調査では、万引き対策への意識、万引きに対する態度について尋ねた。また、店内声かけによる未然防止を今後実施するために、現在の声かけ場所と効果的だと思う声かけ場所、そして、効果的な店内声かけの方法について尋ねた。万引き対策への意識では、レイアウトの変更、店員教育プログラムの必要性、対策のさらなる推進、被害届提出の面倒さ、万引きに対する責任感について4件法で尋ねた。万引きに対する態度では、万引き犯の捕捉、防止のための声かけ、個室に持ち込まれた際の声かけについて4件法で尋ねた。現在の声かけの場所と効果的だと思う声かけの場所では、選択肢として「店舗（販売店・建物）の中」「店舗（販売店・建物）の外」「店舗の敷地内（駐車場など）」「店舗の敷地外」「そ

の他」を挙げて尋ねた。効果的な店内声かけの方法では、どのような声かけをすれば嫌がられないと思うかを自由記述で尋ねた。

アンケートに対して202店舗から回答を得、回収率は64.7%であった。調査協力店舗の種類は、スーパー105店舗、コンビニ23店舗、書店43店舗、薬局22店舗、その他9店舗であった。回答者の性別は、男性178名(88.1%)、女性21名(10.4%)、不明3名(1.5%)であり、回答者の年齢は平均44.0歳、標準偏差は9.787であった。回答者の店舗での立場は、店長173名(85.6%)、経営者8名(4.0%)、その他14名(6.9%)、不明7名(3.5%)であった。

店舗の万引き対策への意識について検討するため、レイアウトの変更、店員教育プログラムの必要性、対策のさらなる推進、被害届提出の面倒さ、万引きに対する責任感の度数分布と平均および標準偏差を算出した(Table 1)。その結果、レイアウトの変更では、「変えてもよい」と「どちらかというに変えてもよい」と答えた店舗が約3分の2を占め、平均も2.874と高い値となった。店員教育プログラムの必要性では、「必要である」と「どちらかというに必要で

Table 2 店舗の万引きに対する態度の度数分布

項目		度数	パーセント	平均値	標準偏差
万引き犯の捕捉：万引きを発見したときに、どのように対応していますか	捕まえていない	6	3.0	3.379	.851
	どちらかというと捕まえていない	30	15.2		
	どちらかというと捕まえている	45	22.7		
	捕まえている	117	59.1		
防止のための声かけ：万引き防止のために、お客様への声かけをしていますか	声かけをしていない	20	10.1	3.005	.935
	どちらかというとし声かけをしていない	26	13.1		
	どちらかというとし声かけをしている	86	43.2		
	声かけをしている	67	33.7		
個室に持ち込まれた際の声かけ：個室(トイレ、更衣室など)に商品を持ち込まれたとき、どうしていますか	声をかけていない	23	12.6	2.907	1.042
	どちらかというとし声をかけていない	39	21.3		
	どちらかというとし声をかけている	53	29.0		
	声をかけている	68	37.2		

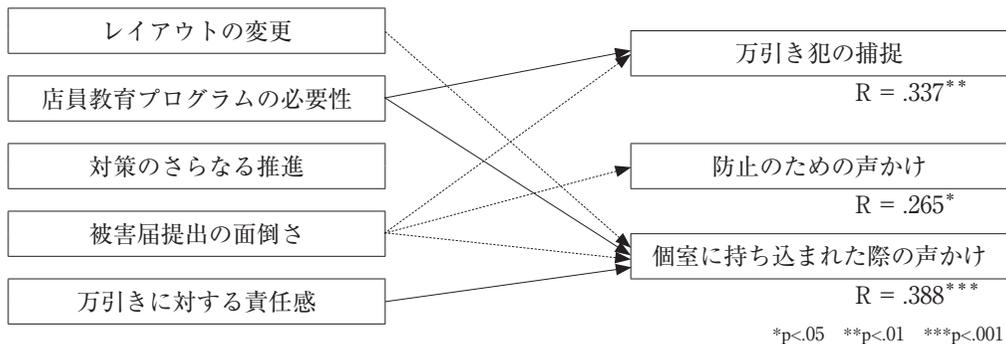


Figure 1 万引き対策への意識が万引きに対する態度に及ぼす影響

ある」と答えた店舗が9割以上を占め、平均も3.487と高い値となった。対策のさらなる推進では、「したほうがよい」と「どちらかというとしほうがよい」と答えた店舗が約7割を占め、平均も2.979と高い値となった。被害届提出の面倒さでは、「面倒ではない」「どちらかというとし面倒ではない」と答えた店舗が約6割を占め、平均も2.010と低い値となった。万引きに対する責任感では、「感じる」「どちらかというとし感じる」と答えた店舗が約8割を占め、平均も3.239と高い値となった。以上の結果から、香川県内の店舗では万引き防止のためにレイアウトの変更を行っても良いと考え、店員教育プログラムの必要性を感じており、未然防止のための声かけなど対策をさらに推進することに好意的であり、万引きに対する責任感が強いことが明らかとなった。また、被害届の提出を面倒であると感じているわけではないことも明らかとなった。したがって、香川県の店舗では、万引

き対策への意識が高いことが明らかとなった。店舗の万引きに対する態度について検討するため、万引き犯の捕捉、防止のための声かけ、個室に持ち込まれた際の声かけの度数分布と平均および標準偏差を算出した (Table 2)。その結果、万引き犯の捕捉では、「捕まえている」と「どちらかというとし捕まえている」と答えた店舗が約8割を占め、平均も3.379と高い値となった。防止のための声かけでは、「声かけをしている」「どちらかというとし声かけをしている」と答えた店舗が約4分の3を占め、平均も3.005と高い値となった。個室に持ち込まれた際の声かけでは、「声をかけている」「どちらかというとし声をかけている」と答えた店舗が約3分の2を占め、平均も2.907と高い値となった。以上の結果から、香川県内の店舗では、万引きを発見した際に捕まえている割合が高く、防止のための声かけや個室に持ち込まれた際の声かけも積極的に行っていることが明らかとなっ

Table 3 店舗の現在の声かけ場所と効果的だと思う声かけ場所の度数分布

項目		度数	パーセント
現在の声かけ場所：万引きがあった場合、どこで声をかけていますか	店舗の中	13	6.4
	店舗の外	145	71.8
	店舗の敷地内	55	27.2
	店舗の敷地外	5	2.5
	その他	4	2.0
効果的だと思う声かけ場所：万引きを防ぐために、どこで声をかければ効果があると思いますか	商品をポケットやカバンなどに入れたとき	82	40.6
	店舗の中	69	34.2
	店舗の外	38	18.8
	店舗の敷地内	10	5.0
	店舗の敷地外	4	2.0
	その他	9	4.5

た。香川県の認知件数の多さはこうした店の努力の結果としても考えられるだろう。また、積極的に声かけを行っているが、これらは店長などの店の代表者の態度であり、店員にどれだけ伝わって実施されているかは今回の調査ではわからなかった。

店舗の万引きに対する態度に万引き対策への意識が及ぼす影響について検討するため、万引き対策への意識を独立変数、万引きに対する態度を従属変数とした重回帰分析を行った (Figure 1)。その結果、万引き犯の捕捉については、店員教育プログラムの必要性 ( $\beta = .127, p < .1$ ) が正の影響を及ぼし、被害届提出の面倒さ ( $\beta = -.157, p < .05$ ) が負の影響を及ぼしていた。防止のための声かけについては、被害届提出の面倒さ ( $\beta = -.145, p < .1$ ) が負の影響を及ぼしていた。個室に持ち込まれた際の声かけについては、店員教育プログラムの必要性 ( $\beta = .222, p < .01$ )、万引きに対する責任感 ( $\beta = .128, p < .1$ ) が正の影響を及ぼし、レイアウトの変更 ( $\beta = -.134, p < .1$ )、被害届提出の面倒さ ( $\beta = -.228, p < .01$ ) が負の影響を及ぼしていた。以上の結果から、店員教育プログラムの必要性を感じており、被害届の提出が面倒でないと感じている店舗ほど万引き犯を捕捉していることが明らかとなった。また、被害届の提出が面倒でないと感じている店舗ほど防止のための声かけを行っていることが明らかとなった。そして、店員教育プログラムの必要性を感じており、被害届の提出が面倒でないと感じお

り、万引きに対する責任感が強い店舗ほど個室に持ち込まれた際の声かけを行っていることが明らかとなった。つまり、店員教育に積極的であり、被害届を面倒でないと感じる意識の高い店舗は、万引き犯をより多く捕捉し、声かけなども行っているといえる。

現在の声かけ場所と効果的だと思う声かけ場所について検討するため、「店舗(販売店・建物)の中」「店舗(販売店・建物)の外」「店舗の敷地内(駐車場など)」「店舗の敷地外」「その他」の割合を算出した (Table 3)。その結果、現在の声かけ場所は「店舗の外」(71.8%) が最も多く、次に「店舗の敷地内」(27.2%) が多かった。効果的な声かけ場所は「商品をポケットやカバンなどに入れたとき」(40.6%) が最も多く、次に「店舗の中」(34.2%) が多かった。以上の結果から、現在、店舗では、店舗の建物の外や駐車場などの敷地内で声をかけているが、ポケットやカバンに入れたときや店舗の建物の中で声をかけるほうが効果的であると考えており、現在の万引きの捕捉の仕方に満足していないことが明らかとなった。

効果的な店内声かけの方法について検討するため、カテゴリーを設定し、自由記述を分類し、その割合を算出した (Table 4)。その結果、自由記述は「カゴの使用の推奨」(53.1%)、「商品をカバン等に入れる行為の制止」(23.4%)、「商品の預かりの提案」(7.0%)、「商品についての確認」(4.7%)、「店員の存在のアピール」(3.9%)、「その他」(7.8%) に分類された。以

Table 4 店舗の効果的な店内声かけの方法のカテゴリー分類の結果と記述例および割合

カテゴリー	記述 例	パーセント
カゴの使用の推奨	お客様にお店のカゴを渡し「このカゴをお使いください」 「お買い物の際には、こちらの買物カゴをお使い下さい」	53.1
商品をカバン等に入れる行為の制止	お客様に「当店ではカバン等に商品を入れることはご遠慮させていただいています」 「精算のお済みでない商品をカバンに入れることはご遠慮いただいております」	23.4
商品の預かりの提案	お客様に「よろしければレジにてお預かり致します」 店のカゴがないので「お持ちの商品をレジカウンターでお預かり致しますようか」	7
商品についての確認	「代金の支払いはお済みですか？」 「先ほどお持ちだった本は、どこに戻されましたか」	4.7
店員の存在のアピール	「何かお探してですか？」 「いらっしゃいませ」	3.9
その他	「万引きは犯罪ですよ」 どうい声かけがいいのか逆に教えてもらいたい	7.8

上の結果から、カゴ使用の推奨が店にとって客を泥棒扱いせず、気分を害さずに未然に防止する声かけであることが示された。

#### 保安員調査の結果

保安員の行っている活動について検討するため、ベテランの保安員20名を対象としたアンケート調査を実施した。アンケート調査では、万引き対策への意識、万引きに対する態度について尋ねた。また、店内声かけによる未然防止を今後実施するために、現在の声かけ場所と効果的だと思う声かけ場所、そして、万引き防止に必要な知識、万引きされやすい商品、万引きする人の特徴について尋ねた。万引き対策への意識では、店員教育プログラムの必要性、対策のさらなる推進、被害届提出の面倒さ、万引きに対する責任感、誤認への恐怖、万引き犯への恐怖について4件法で尋ねた。万引きに対する態度では、万引き犯の捕捉、個室に持ち込まれた際の声かけについて4件法で尋ねた。現在の声かけの場所と効果的だと思う声かけの場所では、選択肢として「店舗（販売店・建物）の中」「店舗（販売店・建物）の外」「店舗の敷地内（駐車場など）」「店舗の敷地外」「その他」を挙げて尋ねた。万引き防止に必要な知識では、万引き犯を捕まえるための準備、万引きされやすい店の特徴、観察すべきポイントについて自由記述で尋ねた。万引きされやすい商品では、コンビニ、スーパー、書店、薬局で万引きされやす

い商品について自由記述で尋ねた。万引きする人の特徴では、視線、動き、持ち物について自由記述で尋ねた。

調査協力者の保安員歴は平均11.08年、標準偏差は5.12であった。調査協力者の性別は男性4名、女性16名であり、年齢は平均49.35歳、標準偏差10.61であった。調査協力者の万引き捕捉件数は1カ月10.05人であった

保安員の万引き対策への意識について検討するため、店員教育プログラムの必要性、対策のさらなる推進、被害届提出の面倒さ、万引きに対する責任感、誤認への恐怖、万引き犯への恐怖の度数分布と平均および標準偏差を算出した（Table 5）。その結果、店員教育プログラムの必要性では、「必要である」と「どちらかという必要である」と答えた保安員が全体を占め、平均も3.700と高い値となった。対策のさらなる推進では、「したほうがよい」と「どちらかというとしたほうがよい」と答えた保安員が約4割を占めたが、平均は2.550とどちらともいえない値となった。被害届の提出の面倒さでは、「面倒である」「どちらかという面倒である」と答えた保安員が約6割を占めたが、平均は2.400とどちらともいえない値となった。万引きに対する責任感では、「感じる」「どちらかというと感じる」と答えた保安員が約8割を占め、平均も3.100と高い値となった。誤認への恐怖では、「怖い」「どちらかという怖い」と答えた保安員が約9割を占め、平均も3.800と高い

Table 5 保安員の万引き対策への意識の度数分布

項目		度数	パーセント	平均値	標準偏差
店員教育プログラムの必要性：万引き防止を目的とした店員教育のためのプログラムが必要であると思いますか	必要でない	0	0.0	3.700	.470
	どちらかというとも必要でない	0	0.0		
	どちらかというとも必要である	6	30.0		
	必要である	14	70.0		
対策のさらなる推進：ポケットやカバンなどに商品を入れた時点で声かけをすることで、万引きを未然に防止したいと考えています。このことについてどう思いますか。	しないほうがよい	2	10.0	2.550	.999
	どちらかというとしんないほうがよい	10	50.0		
	どちらかというとしたほうがよい	3	15.0		
	したほうがよい	5	25.0		
		8	40.0		
被害届提出の面倒さ：万引き犯を捕まえたとき、警察に被害届を提出することが面倒であると思いますか	面倒ではない	8	40.0	2.400	1.231
	どちらかというとも面倒ではない	0	0.0		
	どちらかというとも面倒である	8	40.0		
	面倒である	4	20.0		
万引きに対する責任感：万引きされたとき、責任を感じますか	感じない	3	15.0	3.100	1.021
	どちらかというとも感じない	0	0.0		
	どちらかというとも感じる	9	45.0		
	感じる	8	40.0		
誤認への恐怖：万引きを誤認することが怖いですか	怖くない	0	0.0	3.800	.523
	どちらかというとも怖くない	1	5.0		
	どちらかというとも怖い	2	10.0		
	怖い	17	85.0		
万引き犯への恐怖：万引き犯が怖いですか	怖くない	3	15.0	2.250	.786
	どちらかというとも怖くない	10	50.0		
	どちらかというとも怖い	6	30.0		
	怖い	1	5.0		

Table 6 保安員の万引きに対する態度の度数分布

項目		度数	パーセント	平均値	標準偏差
万引き犯の捕捉：万引きを発見したときに、どのように対応していますか	捕まえていない	0	0.0	3.650	.489
	どちらかというとも捕まえていない	0	0.0		
	どちらかというとも捕まえている	7	35.0		
	捕まえている	13	65.0		
個室に持ち込まれた際の声かけ：個室(トイレ、更衣室など)に商品を持ち込まれたとき、どうしていますか	声をかけていない	11	55.0	1.850	1.040
	どちらかというとも声をかけていない	2	10.0		
	どちらかというとも声をかけている	6	30.0		
	声をかけている	1	5.0		

値となった。万引き犯への恐怖では、「怖くない」「どちらかというとも怖くない」と答えた保安員が約6割を占め、平均も2.250と低い値となった。以上の結果から、保安員では万引き防止のために店員教育プログラムの必要性を感じており、誤認が怖いと感じており、万引きに対する責任感が強いことが明らかとなった。また、未然防止のための声かけなど対策をさらに推進することに賛否両論があり、被害届の提出を面倒であると感じている者も半数近くおり、

万引き犯が怖いという者も3分の1以上いることが明らかとなった。したがって、保安員においても店員教育のプログラムが重要であると考えられていることが明らかとなった。未然防止のための声かけなどは保安員の仕事を奪うことになることにつながると考えられるため、賛否両論があると考えられる。保安員は責任感が強いものの、誤認や万引き犯への怖さももっており、非常に過酷な仕事といえる。

保安員の万引きに対する態度について検討す

Table 7 保安員の現在の声かけ場所と効果的だと思う声かけ場所の度数分布

項目		度数	パーセント
現在の声かけ場所：万引きがあった場合、どこで声をかけていますか	店舗の中	2	10.0
	店舗の外	15	75.0
	店舗の敷地内	7	35.0
	店舗の敷地外	12	60.0
	その他	1	5.0
効果的だと思う声かけ場所：万引きを防ぐために、どこで声をかければ効果があると思いますか	商品をポケットやカバンなどに入れたとき	7	35.0
	店舗の中	4	20.0
	店舗の外	8	40.0
	店舗の敷地内	0	0.0
	店舗の敷地外	3	15.0
	その他	0	0.0

るため、万引き犯の捕捉、個室に持ち込まれた際の声かけの度数分布と平均および標準偏差を算出した (Table 6)。その結果、万引き犯の捕捉では、「捕まえている」と「どちらかというに捕まえている」と答えた保安員が全体を占め、平均も3.650と高い値となった。個室に持ち込まれた際の声かけでは、「声をかけている」「どちらかというに声をかけている」と答えた保安員が約3割を占め、平均も1.850と低い値となった。以上の結果から、保安員では、万引きを発見した際に捕まえているが、個室に持ち込まれた際の声かけは行っていないことが明らかとなった。保安員にとって万引き犯の捕捉は仕事であるため、捕まえていることは当然の結果といえるが、個室に持ち込まれた際などは誤認の恐れが高くなるために声かけを行っていないのだといえる。

現在の声かけ場所と効果的だと思う声かけ場所について検討するため、「店舗(販売店・建物)の中」「店舗(販売店・建物)の外」「店舗の敷地内(駐車場など)」「店舗の敷地外」「その他」の割合を算出した (Table 7)。その結果、現在の声かけ場所は「店舗の外」(75.0%)が最も多く、次に「店舗の敷地外」(60.0%)が多かった。効果的な声かけ場所は「店舗の外」(40.0%)が最も多く、次に「商品をポケットやカバンなどに入れたとき」(35.0%)が多かった。以上の結果から、現在、保安員は、店舗の建物の外や敷地外で声をかけていることが明らかとなった。これは、警察に対する説明で明らかに店の

外に出ていることが求められるからであるといえる。また、店舗の建物の外やポケットやカバンに入れたときに声をかけるほうが効果的であると考えていることが明らかとなった。これは警察への説明の問題もあり、店舗の外で声をかけるのが効果的であるという考えによるものであると言えるが、その一方で商品をポケットやカバンに入れたときに声をかけるのが効果的であると考え、これまでと異なる万引き防止のあり方を求める保安員も一定数存在しているからであるといえる。事実、ポケットやカバンに入れたときに声をかけるような対策は保安員の仕事を奪うことも予測されることから、従来通りの対策でいいとする保安員とこれまでと異なる対策を求める保安員に分かれたのだと推測される。

万引き防止に必要な知識について検討するため、カテゴリーを設定し、自由記述を分類し、その割合を算出した (Table 8)。その結果、自由記述は万引き犯を捕まえるための準備では、店内構造の把握 (70.0%)、死角の確認 (45.0%)、商品の種類や位置の確認 (35.0%)、その他 (5.0%) に分類された。万引きされやすい店の特徴では、大きな棚・柱がある (30.0%)、商品が整理されていない (20.0%)、死角が多い (15.0%)、照明が暗い (15.0%)、その他 (40.0%) に分類された。観察すべきポイントでは、視線・目つき (30.0%)、持ち物 (20.0%)、極端に愛想の良い人または悪い人 (15.0%)、その他 (45.0%) に分類された。以上の結果から、

Table 8 万引き防止に必要な知識の度数分布

項目		度数	パーセント
万引き犯を捕まえるための準備	店内構造の把握	14	70.0
	死角の確認	9	45.0
	商品の種類や位置の確認	7	35.0
	その他	1	5.0
万引きされやすい店の特徴	大きい棚・柱がある	6	30.0
	商品が整理されていない	4	20.0
	死角が多い	3	15.0
	照明が暗い	3	15.0
観察すべきポイント	その他	8	40.0
	視線・目つき	6	30.0
	持ち物	4	20.0
	極端に愛想の良いまたは悪い人	3	15.0
	その他	9	45.0

Table 9 万引きされやすい商品の度数分布

項目		度数	パーセント
コンビニで万引きされやすい商品	雑誌・本	6	30.0
	酒	5	25.0
	菓子	5	25.0
	おにぎり・弁当	5	25.0
	その他	2	10.0
スーパーで万引きされやすい商品	酒	10	50.0
	生鮮品(肉・魚)	8	40.0
	惣菜	8	40.0
	化粧品	7	35.0
	その他	2	10.0
書店で万引きされやすい商品	人気コミック	12	60.0
	学術・専門書	6	30.0
	写真集	3	15.0
	その他	1	5.0
薬局で万引きされやすい商品	サプリメント	9	45.0
	化粧品	9	45.0
	薬	7	35.0
	その他	2	10.0

万引き犯を捕捉するためには、店内構造の把握や死角の確認、商品の種類や位置の確認など店や商品を知ることが重要であることが示された。万引きされやすい店の特徴としては、大きな棚があり、商品が整理されておらず、死角が多く、照明が暗いなど客が見えにくいことが示された。観察すべきポイントでは、視線・目つき、持ち物、極端に愛想の良い人あるいは悪い人など、見るべきポイントがあることが示された。

万引きされやすい商品について検討するた

め、カテゴリーを設定し、自由記述を分類し、その割合を算出した(Table 9)。その結果、自由記述はコンビニで万引きされやすい商品では、雑誌・本(30.0%)、酒(25.0%)、菓子(25.0%)、おにぎり・弁当(25.0%)、その他(10.0%)に分類された。スーパーで万引きされやすい商品では、酒(50.0%)、生鮮品(40.0%)、惣菜(40.0%)、化粧品(35.0%)その他(10.0%)に分類された。書店で万引きされやすい商品では、人気コミック(60.0%)、学術・専門書(30.0%)、写真集(15.0%)、その他(5.0%)に分類された。

Table 10 万引きする人の特徴の度数分布

項目		度数	パーセント
万引きする人の視線の特徴	周囲を気にする	14	70.0
	商品を見ていない	7	35.0
	その他	4	20.0
万引きする人の動きの特徴	動きが素早い	8	40.0
	落ち着きがない	5	25.0
	同じ所を行ったり来たりする	4	20.0
	その他	7	35.0
万引きする人の持ち物の特徴	大き目のバッグ	9	45.0
	口の開いたバッグ	6	30.0
	レジ袋	5	25.0
	その他	6	30.0

薬局で万引きされやすい商品では、サプリメント(45.0%)、化粧品(45.0%)、薬(35.0%)、その他(10.0%)に分類された。以上の結果から、生活上必要だったり、人気があったり、高額であったり、転売可能なものが万引きされやすいといえる。

万引きする人の特徴について検討するため、カテゴリを設定し、自由記述を分類し、その割合を算出した(Table 10)。その結果、自由記述は万引きする人の視線の特徴では、周囲を気にする(70.0%)、商品を見ていない(35.0%)、その他(20.0%)に分類された。万引きする人の動きの特徴では、動きが素早い(40.0%)、落ち着きがない(25.0%)、同じ所を行ったり来たりする(20.0%)、その他(35.0%)に分類された。万引きする人の持ち物の特徴では、大き目のバッグ(45.0%)、口の開いたバッグ(30.0%)、レジ袋(25.0%)、その他(30.0%)に分類された。以上の結果から、一般の買い物客と異なるような視線や動き、持ち物などが特徴として示された。

#### 未然防止のための店内声かけマニュアルの作成

調査の結果から、店舗は店内で声をかけるのが効果的であると考えており、店舗は店内声かけについて推進してもよいと考えており、店舗と保安員は店員教育プログラムが必要であると考えていることが示された。そこで、店舗および保安員の調査結果をもとに、エビデンスに基づく効果的な店内声かけについて検討し、実際

に店舗における活用が可能なマニュアルを作成することとした。このため、作成のポイントとしては、①「未然防止のための店内声かけマニュアル」と明確に位置づける、②調査結果から明らかになった万引きされないための準備、雰囲気作り、観察のポイント、未然防止のための声かけの仕方についてわかりやすく解説する、③全体の構成としては、万引きされにくい店を作るための準備、万引きされにくい雰囲気作り、万引きを見つける観察のポイント、万引きを発見した際の声かけの仕方、声かけをしてクレームを付けられた際の対応と順に読むことで、手順がわかる、④最も重要な声かけについてはチャート式にする、⑤店内での使用を考慮してA4版裏表のラミネート加工とする、などである。

具体的な内容については以下のとおりである。万引きされにくい店を作るための準備においては、保安員の調査結果から、店内構造の把握、死角の確認、商品の種類や位置の確認の重要性が示されたことから、店内構造の把握と死角の確認と商品の種類や位置の確認の項を作り、調査結果に基づきポイントを記した。万引きされにくい雰囲気作りにおいては、保安員の調査結果とこれまでの調査結果から、元気よくあいさつしましょう、死角をできるだけ減らしましょう、商品を整頓し、不必要な在庫品などを売り場に出さないようにしましょう、店内を明るくしましょうの項を作り、調査結果に基づきポイントを記した。万引きを見つける観察の



Table 11 未然防止のための店内声かけ実施への意識の度数分布

項目		度数	パーセント	平均値	標準偏差
声かけの仕方の理解：店内での効果的な声かけの仕方がわかりましたか	わからなかった	0	0.0	3.579	.507
	どちらかというとわからなかった	0	0.0		
	どちらかというとわかった	8	42.1		
	わかった	11	57.9		
声かけの有効性：店内での声かけは万引きの未然防止に有効だと思いますか	有効ではない	0	0.0	3.842	.375
	どちらかというとも有効ではない	0	0.0		
	どちらかというとも有効である	3	15.8		
	有効である	16	84.2		
万引きの識別：店内で万引きする人を見分けることができますか	できないと思う	0	0.0	2.474	.513
	どちらかというともできないと思う	10	52.6		
	どちらかというともできると思う	9	47.4		
	できると思う	0	0.0		
声かけの実行：店内での声かけは自分でもできると思いますか	できないと思う	0	0.0	3.368	.684
	どちらかというともできないと思う	2	10.5		
	どちらかというともできると思う	8	42.1		
	できると思う	9	47.4		
普及による万引き減少への期待：店内での声かけが香川県全域に広まっていった場合、万引きは減ると思いますか	減らないと思う	0	0.0	3.842	.375
	どちらかというとも減らないと思う	0	0.0		
	どちらかというとも減ると思う	3	15.8		
	減ると思う	16	84.2		

安員の指導のもと、店内に店内ルールを記したポスターを掲示した。その後、声かけマニュアルも含めた店員教育の効果について検討するため、店員19名を対象としたアンケート調査を実施した。アンケート調査では、未然防止のための店内声かけ実施への意識について尋ねた。未然防止のための店内声かけ実施への意識では、声かけの仕方の理解、声かけの有効性、万引きの識別、声かけの実行、普及による万引き減少への期待について4件法で尋ねた。

調査協力者の性別は、男性15名(78.9%)、女性4名(21.1%)であり、年齢は平均35.5歳、標準偏差は11.462であった。調査協力者の店舗での立場は、19名全員が正社員であった。万引きの接触経験は、見たことがあるのは10名(52.6%)であり、見たことがないのは9名(47.4%)であった。万引きの捕捉経験は、捕まえたことがあるのは11名(61.1%)であり、捕まえたことがないのは7名(38.9%)であった。

店員の未然防止のための店内声かけ実施への意識について検討するため、声かけの仕方の理解、声かけの有効性、万引きの識別、声かけの実行、普及による万引き減少への期待の度数分

布と平均および標準偏差を算出した(Table 11)。その結果、声かけの仕方の理解では、「わかった」と「どちらかというともわかった」と答えた店員が全体を占め、平均も3.579と高い値となった。声かけの有効性では、「有効である」と「どちらかというとも有効である」と答えた店員が全体を占め、平均も3.842と高い値となった。万引きの識別では、「どちらかというともできると思う」と答えた店員が約半数を占め、平均も2.474とどちらともいえない値となった。声かけの実行では、「できると思う」と「どちらかというともできると思う」と答えた店員が約9割を占め、平均も3.368と高い値となった。普及による万引き減少への期待では、「減ると思う」と「どちらかというとも減ると思う」と答えた店員が全体を占め、平均も3.842と高い値となった。以上の結果から、店員では声かけの仕方がわかり、声かけを有効で実行できそうだと思っており、こうした対策が普及することで万引きが減ると考えていることが示された。したがって、未然防止のための店内声かけの効果が示唆された。ただし、実際に未然防止のための店内声かけにより万引きの件数が減ったのかどうか

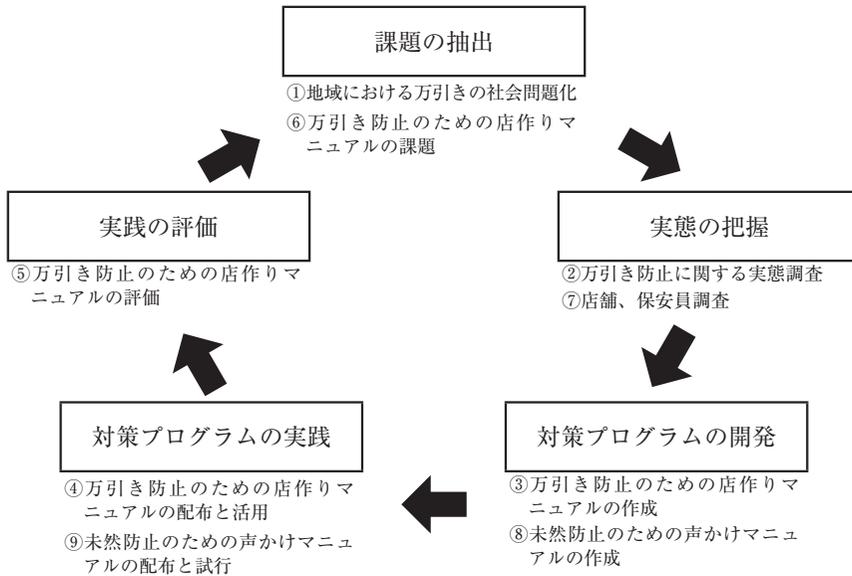


Figure 2 万引き防止対策における社会的実践のサイクル

は検証されていないため、今後、検証を行う必要があるだろう。

#### まとめと今後の課題

本稿では、2011年に作成し、配布した万引き防止のための店作りマニュアルの問題を明らかにした。次に、店舗および保安員に対して調査を行い、店舗および保安員の調査結果をふまえて未然防止のための声かけマニュアルを作成した。その後、香川県内の店舗において実験的に試行してその効果について検討した。未然防止のための声かけマニュアル作成後の店舗やマスコミからの反響は大きく、「香川方式」として注目され、万引きの認知件数の減少に寄与するものであると考えられる。また、こうした調査と社会的実践を継続的に行っていくことで、さらに対策の改善が可能になるといえる。

これまで行ってきた万引き防止に関する社会的実践をまとめると Figure 2 のように図式化できるだろう。事業開始から考えると、店舗に対する取り組みは、①地域における万引きの社会問題化、②万引き防止に関する実態調査、③万引き防止のための店作りマニュアルの作成、④万引き防止のための店作りマニュアルの配布と活用、⑤万引き防止のための店作りマニュアル

の評価、⑥万引き防止のための店作りマニュアルの課題、⑦店舗および保安員調査、⑧未然防止のための声かけマニュアルの作成、⑨未然防止のための声かけマニュアルの配布と試行の9つの段階に大きく分けることができる。なお、①から②はこれまでの被疑者や店舗を対象とした調査研究(大久保・堀江・松永・永富・時岡, 2012; 大久保・堀江・松浦・松永・江村, 印刷中)で検討し、③から⑤は時岡・大久保・堀江・松永(2012)で検討してきた。本論文で検討したのは、⑥万引き防止のための店づくりマニュアルの課題から⑨未然防止のための声かけマニュアルの配布と試行である。

これらの取り組みについて、PDCAサイクルなどを参考にまとめると「課題の抽出」から始まり、「実態の把握」、「対策プログラムの開発」、「対策プログラムの実践」、「実践の評価」、そしてまた「課題の抽出」へと循環する社会的実践のサイクルとしてとらえられる。この社会的実践のサイクルの特徴としては、課題の抽出から始まることと、サイクルが循環し始めると、常に社会的実践の改善を目指すため、螺旋状に上昇していくことが挙げられる。今後はこのサイクルに基づいて、万引き防止対策をさらに改善していくことが求められるだろう。

本事業では、こうしたサイクルを循環させ続けることで、常に現場や社会の声に応え、社会的実践を円滑に行うことを目指している。したがって、これまでの結論ありきの対策などは異なる社会的実践として位置づけられる。特に万引き防止対策では、警察の視点のみから結論ありきで検討され、精神論が叫ばれてきたことから、店舗や保安員や弁護士など万引きを取り巻く現場の声を踏まえた対策を立てることは非常に意義があるといえる。

今後の課題としては、本研究で提案した社会的実践サイクルに基づき、新たな課題を抽出し、現場の実状にあった対策を立て続けることが必要であろう。今回の社会的実践は、書店等ではカゴの使用の推奨は実態に合わないという問題もあるため、様々な業種の店舗においても実施可能で効果的な未然防止のための声かけを今後考えていく必要があるだろう。つまり、今後、さらに現場での課題を抽出し、実態把握を行い、実践し、さらに評価することで取り組みをさらに改良していく必要があるといえる。

また、今後はこうした万引き防止におけるエビデンスに基づいた社会的実践を全国に普及させることが求められるだろう。これまで万引き防止に限らず、防犯対策は、データに基づかず思い込みや主観で考えられてきたといえ、こうしたエビデンスに基づいた取り組みは意義のあるものといえる。そして、万引き防止に限らず、他の犯罪防止においても本研究で提案した社会的実践のサイクルは適用可能であると考えられるため、今後、他の犯罪対策においてもエビデンスに基づいた取り組みを進めていく必要があるだろう。

## 引用文献

降旗志郎 1983 長野県下における万引き非行の実態科学警察研究所報告防犯少年編, 24, 106-116.  
 「万引きをしない・させない」社会環境づくりと規範意識の醸成に関する調査研究委員会 2009 万引きに関する調査研究報告  
 宮前淳子・堀江良英・松永祐二・宮前義和・大久保智生 2012 一般高齢者における万引きに関する

心理的要因の検討：家族および友人関係、攻撃性、認知症傾向が万引きへの意識に及ぼす影響地域環境保健福祉研究, 15, 1-8.

永岡理香 2003 万引きを規定する要因の検討 関西大学大学院人間科学：社会学・心理学研究, 58, 185-196.  
 大久保智生 2011 現代の子どもや若者は社会性が欠如しているのか：コミュニケーション能力と規範意識の低下言説からみる社会 大久保智生・牧郁子編 実践をふりかえるための教育心理学：教育心理にまつわる言説を疑う ナカニシヤ出版 pp.113-128.  
 大久保智生 2012 青少年の万引きに対する規範意識：香川県子ども安全・安心万引き防止事業の取り組みから 青少年問題, 646, 44-47.  
 大久保智生・堀江良英・松永祐二・永富太一・時岡晴美 2012 万引きの多い店舗はどのような特徴があるのか：万引き防止対策に関する店舗調査から 香川大学教育学部研究報告, 138, 11-21.  
 大久保智生・堀江良英・松浦隆夫・松永祐二・江村早紀 印刷中 万引きに関する心理的要因の検討：万引き被疑者を対象とした意識調査から 科学警察研究所報告  
 大久保智生・堀江良英・松浦隆夫・松永祐二・江村早紀・永富太一・時岡晴美 2012 万引き被疑者における万引きに関する心理的要因間の関連の検討：家族および友人関係と攻撃性が万引きの心理に及ぼす影響 子育て研究, 2, 13-20.  
 大久保智生・堀江良英・松浦隆夫・松永祐二・宮前淳子・宮前義和・岡田涼・七條正典 2012 一般の青少年と高齢者の万引きに関する心理的要因の検討：世代によって万引きへの意識はどのように異なるのか 香川大学教育学部研究報告, 138, 1-10.  
 大久保智生・堀江良英・松浦隆夫・松永祐二・永富太一・時岡晴美・江村早紀 印刷中 店舗における万引きの実態と万引きへの対応と防止対策の検討：香川県内の店長と店員を対象とした聞き取り調査から 法と心理  
 大久保智生・宮前淳子・宮前義和 2012 青少年の万引きに関する心理的要因の学校段階別の検討：家族および友人関係と攻撃性が万引きへの意識に及ぼす影響 生徒指導研究, 11, 57-67.

- 大久保智生・杉本ゆか・時岡晴美・常田美穂・西原和代 2012 保護者は子どもの万引きをどのようにとらえているのか：保護者の万引きに関する心理的要因の検討 香川大学教育実践総合研究, 25, 69-79.
- 大久保智生・時岡晴美・有馬道久・松浦隆夫・高橋護 2012 万引き防止啓発の動画制作プロジェクト参画による青少年の意識変化について(その2)：動画の視聴者の評価と参画した大学生と中学生の意識調査から 香川大学教育実践総合研究, 25, 57-68.
- Sherman, W. S. 2004 Evidence-based crime prevention: a global view from the U.S. to Japan. Japanese Journal of Sociological Criminology, 29, 82-93.
- 四方光 2005 社会安全政策におけるエビデンス・ベイスド・ポリシーの意義 犯罪社会学研究, 30, 33-47.
- 皿谷陽子・三阪梨紗・濱本有希・平伸二 2011 万引き被疑者の特徴に関する質問紙調査 福山大学こころの健康相談室紀要, 5, 45-52.
- 「書店経営」編集部編 1998 書店のための万引防止読本 メディアパル
- 田中純夫・田中奈緒子 1996 万引きで補導・検挙された少年の生活意識と犯行時の意識 犯罪心理学研究, 34, 1-16.
- 時岡晴美・大久保智生・有馬道久 2012 万引き防止啓発の動画制作プロジェクト参画による青少年の意識変化について(その1)：青少年編「万引きはゲームじゃない」のDVD制作による啓発効果を中心に 香川大学教育実践総合研究, 24, 153-160.
- 時岡晴美・大久保智生・堀江良英・松永祐二 2012 万引き防止対策のエビデンスに基づく実践とその効果：調査結果に基づく店舗向け万引き防止マニュアルの作成とその利用状況および効果 香川大学教育学部研究報告, 138, 75-81.
- 上野行良・中村晋介・本多潤子・麦島剛 2009 中学生の万引き行為に関連する要因 福岡県立大学心理臨床研究, 1, 67-73.
- 全国万引犯罪防止機構 2010 第5回全国小売業万引被害実態調査報告書